

福音のはじめ

大澤 香

奨励者紹介[おおざわ・かおり]

神戸女学院大学文学部総合文化学科専任講師

神戸女学院大学チャプレン

同志社大学神学部非常勤講師

神の子イエス・キリストの福音の初め。

預言者イザヤの書にこう書いてある。

「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、

あなたの道を準備させよう。

荒れ野で叫ぶ者の声がする。

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。』」

そのとおり、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼（〔バプテスマ〕）を宣べ伝えた。ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼（〔バプテスマ〕）を受けた。ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼（〔バプテスマ〕）を受けたが、その方は聖霊で洗礼（〔バプテスマ〕）をお授けになる。」

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼（〔バプテスマ〕）を受けた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて、霊が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

（マルコによる福音書 1章1―11節）

皆さまこんにちは。神学部嘱託講師をしております大澤と申します。今年の4月から神戸女学院大学という大学で働いております。私は博士前期・後期課程と同志社で学び、3月までは同志社大学の教員としてお世話になりましたので、同志社大学のことは、大切な母校と思っております。こちらの京田辺キャンパスでは、週に一度、旧約聖書入門の授業を担当しています。

今日の聖書の箇所は、マルコによる福音書の初めの部分を選ばせていただきました。一番初めの1章1節に「神の子イエス・キリストの福音の初め」と書かれています。福音書の一番初めに書かれている言葉ですので、ここには、マルコによる福音書の著者の強い思いが込められている、と考えられます。「神の子イエス・キリストの福音の初め」。ギリシャ語で「初め」というのは「アルケー」という言葉で、旧約聖書の創世記の最初の「初めに」というところにも、ギリシャ語訳ではこの言葉が使われています。

「初め」を覚えて

ところで、今の季節は実は「初め」ということと、とてもかかわりの深い季節です。秋学期もほぼ半分が過ぎて、年末が近づいてくるこの時期に、「なぜ『初め』?」と思われるかもしれませんが、実はいくつかの大切な「初め」を記念する季節です。

一つ目の「初め」は、今年は12月2日からクリスマスを迎える準備としての待降節（アドベント）が始まりますが、キリスト教の一年の暦というのは、このアドベントから始まります。

それから11月25日の日曜日は収穫感謝日ですが、それに先立つ11月22日の木曜日が、アメリカでは Thanksgiving Day として祝われます。収穫感謝日はもともとキリスト教の暦にもありましたが、アメリカでは、最初に移住した清教徒（ピューリタン）のピルグリム・ファーザーズのアメリカへの定住が成功したことを記念して、クリスマスと並ぶほどの国民の祝日としてこの日を祝います。イギリスで英国教会の圧力を受けた清教徒たちは、信教の自由を求めてアメリカに渡ります。そして1620年11月に、ピルグリム・ファーザーズがメイフラワー号でプリマスに上陸しますが、その年の冬はとても寒く、寒さと飢えの中で上陸した人々の多くが亡くなったそうです。その厳しい冬を乗り越え、翌年の秋に実った収穫を神に感謝したというのが、感謝祭の起源とのこと。Thanksgiving Day に七面鳥を食べるのは、当時人々が野生の七面鳥を食料にして命をつないだことを記念してのことだと聞きました。現在のアメリカの歴史の「初め」を記念する日と言えるかと思います。これが二つ目の「初め」です。

そして三つ目の「初め」は、皆さんに最も関係があるのではないかと思います。同志社大学の創立記念日が、11月29日です。「建学の精神とキリスト教」の授業で学ばれてご存知の方も多いと思いますが、同志社大学の創立者新島襄先生は、まだ日本が江戸時代であった幕末の1864年、21歳の時に、鎖国令を犯して箱館から上海行きのベルリン号に乗り込み、密出国して上海へ渡り、そこからワイルド・ローヴァー号に乗り換えてボストンに渡ります。無断で国外に出た者は見つければ処刑される時代でした。

アメリカに渡った新島先生は、多くの人の助けを得て、フィリップス・アカデミー、アーモスト大学、アンドーヴァー神学校で学びます。アメリカで新島先生が暮らしたニューイングランドは、かつてイギリスからピルグリム・ファーザーズが移住して始まったアメリカ建国の中心地でした。新島先生はアメリカで10年間勉強された後、1874年に牧師（宣教師）となって、すでに江戸から明治の時代になっていた日本に帰国します。そして翌年の1875年の11月29日に、同志社英学校が開校します。ですから、この季節は、皆さんの学ばれている同志社大学の「初め」を記念する時期でもあります。

ところで、私が働いております神戸女学院大学も、同志社大学ととてもつながりの深い大学です。神戸女学院大学は、アメリカから派遣された二人の女性宣教師イライザ・タルカットとジュリア・E・ダッドレーによって、1875年に日本の女性の教育のために設立されました。1875年は同志社の設立と同じ年なのですが、神戸女学院は10月12日が創立記念日です。神戸女学院を設立したお二人の先生を派遣したアメリカン・ボードという宣教師派遣団体は、アメリカから帰国する新島襄先生を宣教師として派遣した団体です。

神戸女学院で働いておりますと、いろいろな時に女学院の歴史を学ぶ機会があり、その際に同志社大学や新島襄先生とのつながりを教えていただくことが多々あります。神戸女学院で私の研究室はデフォ

レスト館という建物にあるのですが、この建物の名前は、神戸女学院の第五代院長のシャーロット・B・デフォレスト先生の名前から付けられています。

このデフォレスト先生のご両親もアメリカン・ボードの宣教師として日本に派遣されたのですが、お二人が宣教師に任命されたのは、1874年10月9日、ラットランドのグレース教会で開催されたアメリカン・ボード第65回年会でした。アメリカン・ボードの第65回年会というのは、その最終日に新島襄先生が、祖国日本にキリスト教主義の学校をつくることを訴えて約5000ドルの寄付を受け、日本に宣教師として派遣されることになった年会です。その年会での新島先生の演説をデフォレスト先生のご両親も聞いていたということです。その後、新島先生とデフォレスト先生のご両親は、同じ船に乗って日本に渡られました。そして後に神戸女学院の院長となる、日本で生まれたお二人の娘のシャーロット・B・デフォレスト先生に幼児洗礼を受けたのは新島先生だったとのことでした。

本当の「初め」

キリスト教の暦の1年の初め、アメリカの建国の初め、同志社大学の初め。もうじき記念されるさまざまな、大切な「初め」。それぞれに大切な「初め」を記念する時ですが、これらの「初め」は、同時に深いところにつながっているのではないかと思います。

新島先生がアメリカで学ばれたフィリップス・アカデミーの校章には、ラテン語で FINIS ORIGINE PENDET（終わりははじめに依存する）と書かれています（竹中正夫 『C・B・デフォレストの生涯』 創元社 2003年 5頁参照）。この言葉は、成長して実り豊かな人生を得るための準備として若い間に勤勉に学ぶように、との意味が込められているとも言われるようですが、伝統ある学校の校章に記された「終わりははじめに依存する」という言葉は、何か、本当の「初め」にあるものを示している言葉のようにも思えてならないのです。それぞれの学校や組織に大切な「初め」があるのですが、本当の「初め」、一番の「初め」とは何でしょうか？

フィリップス・アカデミーのその校章には、もう一つ別の言葉も書かれています。NON SIBI という言葉です。ラテン語で「自分のためではなく」という言葉です。この言葉は、新島先生や神戸女学院の創立者の先生方を派遣した宣教師団体アメリカン・ボードの中で、合言葉のように大切にされていた言葉だと言われています。私の勤める神戸女学院でも、今も大切にしている言葉です。

ではこの NON SIBI（自分のためではなく）は、どこから出ている言葉なのでしょう？それはやはり、聖書に記されているイエス・キリストから出ている言葉なのだと思います。

福音書に記されているイエス。それは、当時の人々の中で交わりから排除されていた人々や、社会の中で重荷を負わされていた人々のところに行って、共に食事をし、温かな交わりを結び、神の国の到来を伝えた人でした。荒井献氏は、地上のイエスの姿を記す福音書の冒頭に「神の子イエス・キリストの福音の初め」と記したマルコによる福音書の著者の思いがあるのだと指摘されています。新約聖書の中の多くの書簡を残したパウロという人がいます。パウロは、イエスの十字架の死と復活の姿に、神からのメッセージである「福音」を読みとった人でした。福音書はパウロの手紙よりもさらに後の時代に書かれていますので、勿論イエスの十字架と復活を知った上で書かれています。その上で、地上で生きたイエスの姿を記し、そこに「福音の初め」と記した福音書の著者は、パウロがイエスの十字架と復活に見た「福音」の

メッセージを、人々のために生きたイエスの人生の姿、そのように生きたイエスを神が「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」と全肯定された姿に重ねているのだと思われます（『荒井献著作集』10 岩波書店 2002年 15頁参照）。それは、地上でそのように生きたイエスの姿こそが、福音、神の良き知らせの原点、「初め」であるという主張と見ることもできるかもしれません。

全くの未知の世界であった日本にキリスト教を伝えた宣教師の方たちを支えていた NON SIBI（自分のためではなく）の思いも、源をたどると、それは他者のために己を差し出すように生きたイエスの姿にたどりつくのだと思います。そしてそのようにして宣教師の方々が伝えようとしたメッセージそのものが、皆が互いに、自分のためではなく、他者のために生きる、そのような社会、世の中をつくることを目指したものでした。私たちは、そのような思いによって建てられた学校で、学び、働いていることを覚えていたいと思うのです。

NON SIBI の精神

最後に、新島襄先生から洗礼を授けられた、神戸女学院第五代院長のデフォレスト先生が、その院長時代に書かれたある文章をご紹介します。一般向けに書かれたと思われる、大変分かりやすい文章となっています（太平蓄音器株式会社『タイヘイレコード M932—A』所収「ある日の感想」より、旧漢字・旧仮名遣いを現代のものに変換し、抜粋にてご紹介いたします。原稿と音声若干異なる箇所は、音声を原稿に反映させています）。

先日神戸教会で「子供の日」の礼拝をまもりまして其演壇に多くの花が美しくかざってございました中に可愛いお子さん達が熟練した讃美のうたを歌うのをうかがいまして、今更に感じましたことは第二の国民たるべき小さい方々を僻（ひが）まずに真直に育ててやらなければならないということでした。或る話しにお爺さんが小川を渡る橋を一生懸命に工事して居るのを見た人が、「お爺さん、そんなに骨折って丈夫につくらなくてもいいんじゃないでしょうか、この橋はそう長くお使用なさるのではないのでございましょう」といいました。ところがお爺さんは「之を築いて居るのは自分のためではない、あとの人のためです」と答えました。それで私共は毎日の仕事でもって作って居る将来に渡る橋は丈夫なもので、次の人の役に立つものでなければなりません。・・・（中略）

・・・世中の禍、社会の不公平不正、圧迫等の悪習をなおして義と愛との世界にならしめるつとめが私共にあるならば、其仕事の途中で私共が亡ります前にそのあと継ぎをこしらえておかねばなりません。親として、又教師として保護者として、又は友達として少年、青年、男女を相手にして居ります以上、真面目に真剣にその擁護教育のためにつくさなければなりません、苦心失望は必ずございます失敗もあるかも知れませんが、この多大なる仕事を担ってゆく使命は人間の力ではなく、神様の与え給うその力によって果すものでございます。

ここには NON SIBI の精神があふれていると感じます。そしてここに語られている、社会を「義と愛の世界」とする「つとめ」は、現在の私たちの生きる日本の社会においても、今なお、必要とされている「つとめ」だと思います。

皆さんが大学で学ばれる時、大学がその上に建てられている建学の精神を共に学び、自分のためだけでなく共に生きる他者のために、わたしたちの社会、世界のために、自分自身の学びを捧げてゆく、そのような学びをしていただきたいと思います。

2018年11月14日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録